

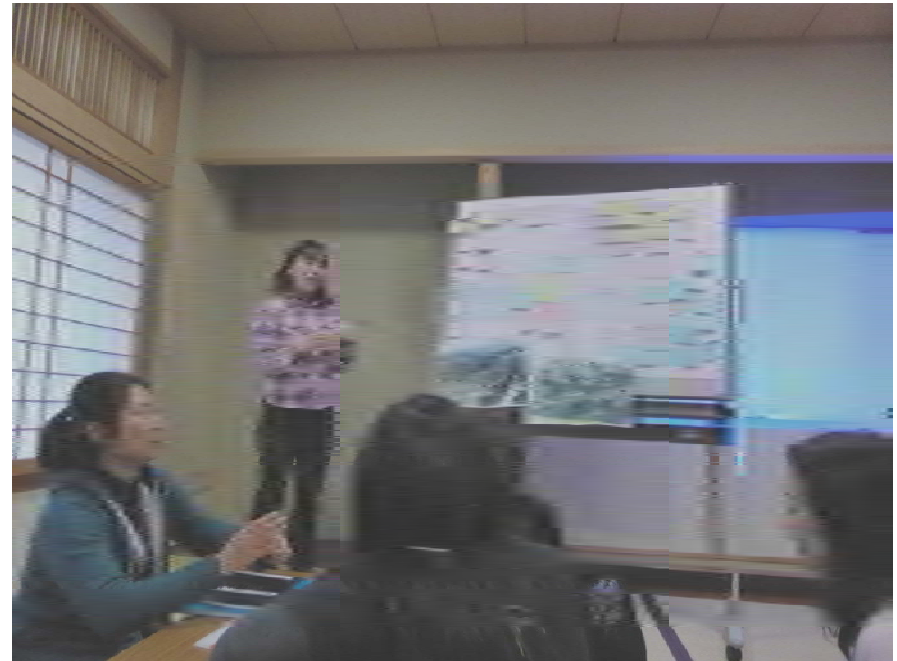
学校を核とした子どもの視点からの復興まちづくりの支援

遊びとまち研究会
せんたプロジェクト

25年度の活動

1. 三世代遊び場マップを完成する
2. マップを地元で活用してもらえるように学校関係、子ども支援や子育て支援等のネットワークに働きかける
3. 仙台の知恵と経験を世田谷に活かす：
 - － 震災後の時間経過の中での子育て中の世帯が抱えるニーズや子どもの役割の時系列把握
 - － 学校と周辺地域の役割とその分担

六郷での子育て世代交流：マップと震災後の子育て世帯のニーズの変遷ヒヤリング



子育て関連ニーズの時系列変化

直後:とにかく避難所へ(何も持たない人も多く、家が無事だった人が下着を取りに帰り、配った)

数日後:小さい子どものいる家族は避難所には入らないことも多く、友人のつてや遠い親族を頼って移って行った

1週間以内にライフラインが復活、子どものいる家族は家が残っていて帰れる人は帰宅した。物資は不足気味だった。

1ヶ月:子どもに疲れが見えてきた。痩せてきた。数少ないお店に長い列を作る人が出始めた。子どもが心配で仮設入居を決めた。学校の開始。

1-2年:仮設から自宅再建へ。被災した学校の子どもたちは間借り先の学校で懸命に適応しようとしている。

～現在:大人の様子、家庭の状況に合わせようとする。年齢によって被災時のことについて語るかどうかはわかるようだ。

マップの完成



地域のことを子どもたちに伝える授業と マップの配布



小学校高学年以上の子どもたちの避難生活での役割(ヒヤリングによる)

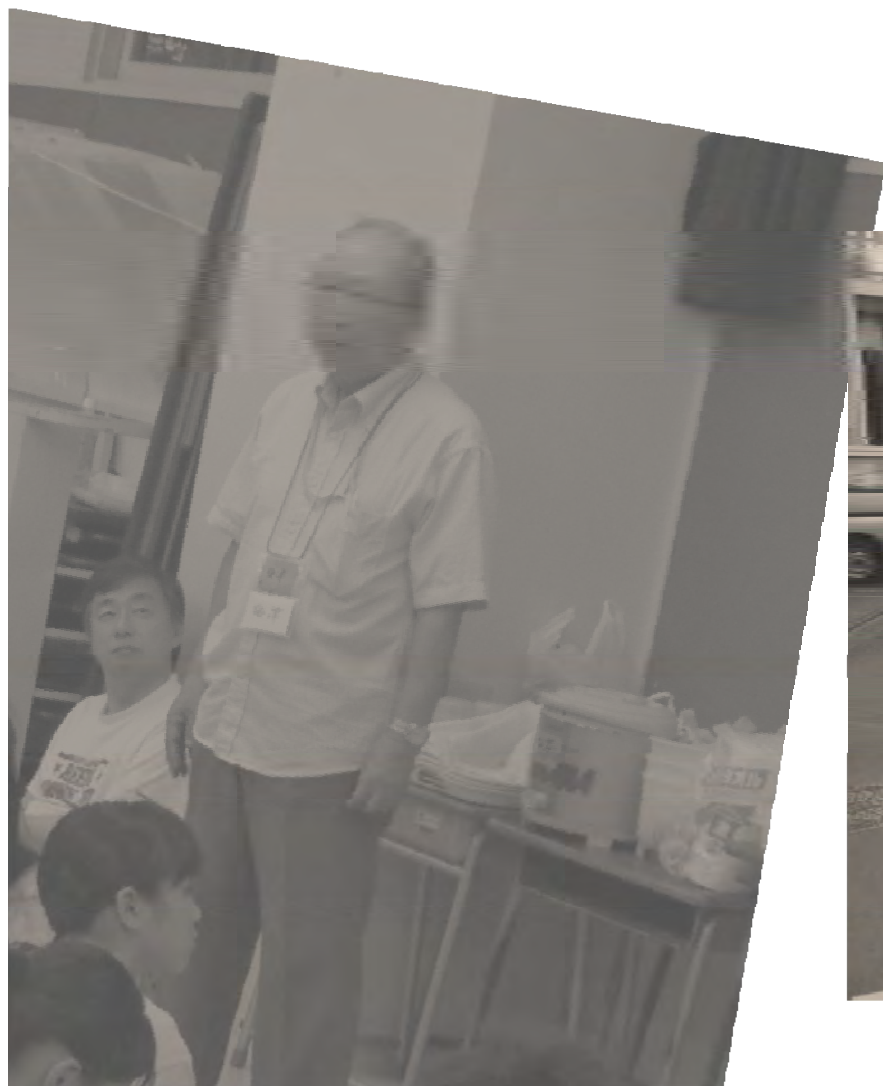
数週間: 物資配布に大きい子どもたちは協力したが、配布方法を巡り争いも起きた。せっかくの子どもたちの行動にもかかわらず避難を受けたことで、親たちが激怒する場面もあった。

1～数カ月:

～現在: 周囲の状況、家族の様子を感じ取るらしく、子どもが我慢しているのを感じる。低学年だった子は被災時のことを語るようになってきた。

しかし、高学年の子は話をそらしたり、元の家の方面に自分からは絶対に行こうとしない。周囲に友人もなく、せっかく一番遊べる年齢だが...

「弱者の安全確保の重要性」 三宿での要介護者避難訓練の実施

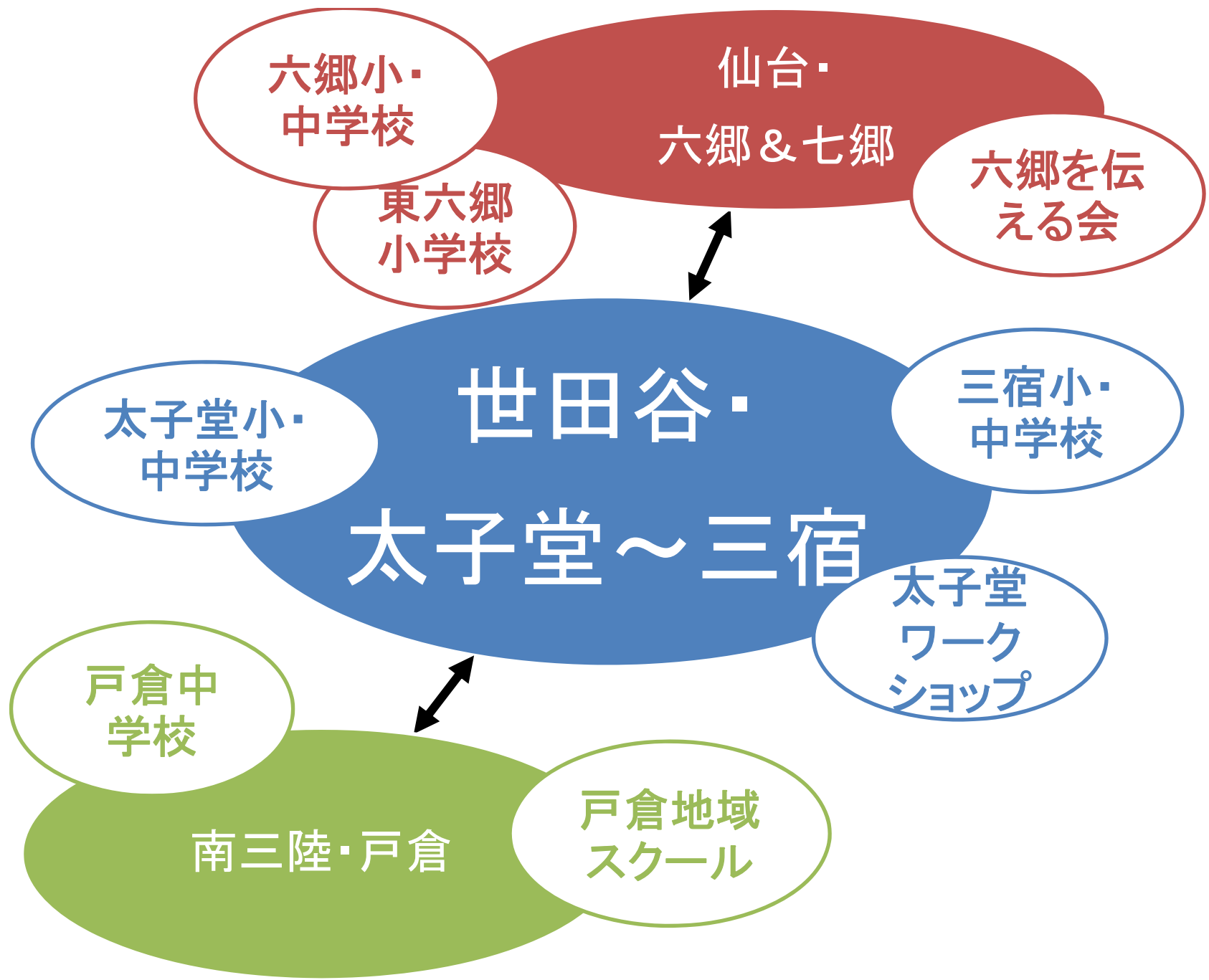


避難所運営における課題 (南三陸・戸倉中学校の場合)



若者から若者へ：時に思い出してほしい、
出来ることから備えてほしい





世田谷区への提言(1)避難所や仮設住宅への子どもたちの広場の設置

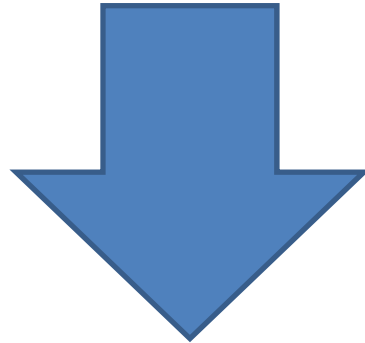
- 心理的なトラウマ、避難のための生活ストレスの負担
- 不安定な心理状態、反抗的な態度、学校再開後の適応のさまたげ




- ストレス発散のための遊べる場の確保
- 地域のつながり再興のきっかけにもなる
(遊び場併設の「おちゃっこのみ」)

世田谷区への提言(2)学校の避難所運営マニュアルで想定外の事柄への対策

- 避難所運営を担った戸倉中学教頭の話から「想定外」のことが頻発する経験
- 仙台市内の複数個所で避難所運営を担った校長先生の話: 街中の学校特有の問題



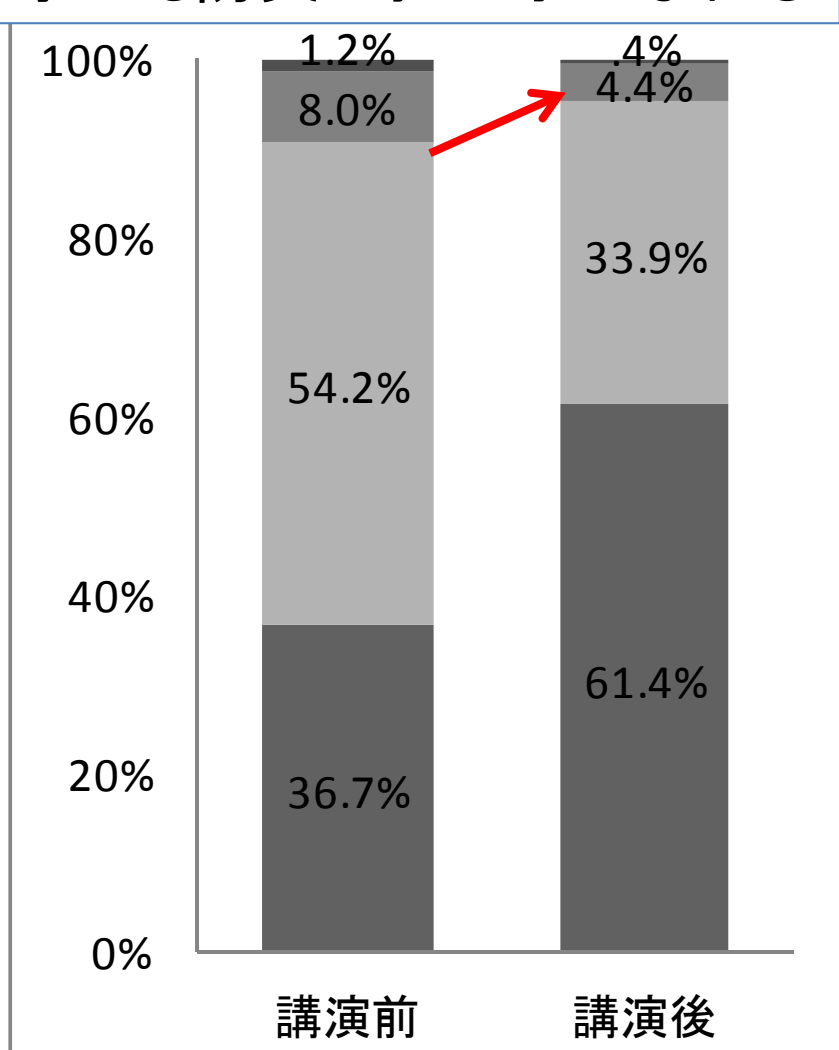
- トイレ問題、衛生問題への備えの徹底
- 帰宅困難者、外国人、ホームレス



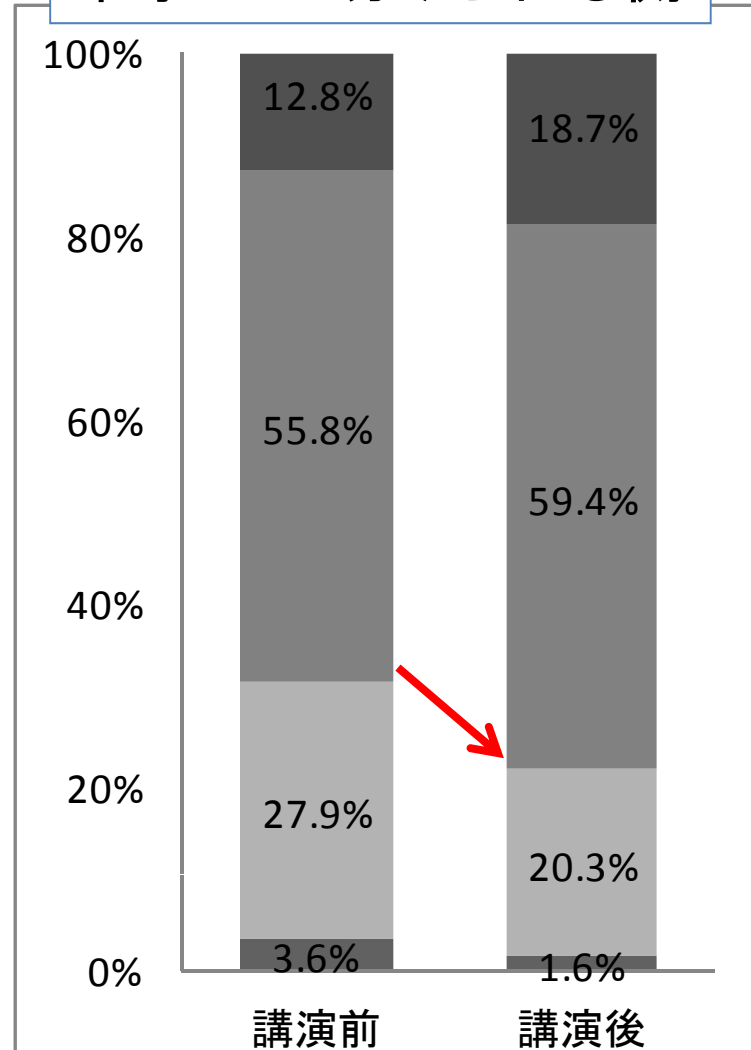
世田谷区への提言 (3) 広域避難場所への 避難道路の改善

世田谷区への提言(4)中学生の役割 について自覚できる教育を

中学生も防災の担い手になれる



中学生は助けられる側



提言(まとめ)

1. 避難所や仮設住宅に「子どもの広場」の設置
2. 学校の避難所運営マニュアルで想定外の事柄への対策
3. 広域避難場所への避難道路の改善
4. 中学生の役割について自覚できる教育を